名古屋大学東洋史研究報告　四十五号　二〇二一年三月発行

批評と紹介

井上徹『華と夷の間＝明代儒教化と宗族』

城地　孝

一

本書は井上徹氏（以下、著者と略記）の二冊目の単著である。宋代以降の宗族の特質と歴史的展開を探求したという前著『中国の宗族と国家の礼制』（研文出版、二〇〇〇年。以下、前著と略記）をふまえ、二〇〇〇年から二〇一四年までに発表された諸論考を三部十三章に再構成し、序章・終章および付篇をくわえて本書は構成される。具体的な章構成は以下のとおり。

序章
第一部　「華」と「夷」の間
第一章　明朝の対外政策と両広社会
第二章　民族反乱の勃発
第三章　「華」はどのように「夷」を包摂したか？
第四章　明朝の州県管理――広東羅定直隷州の創設――
第二部　儒教化の動向
第五章　魏校の淫祠破壊令――広東における民間信仰と儒教――
第六章　中国近世の都市と礼の威力
第七章　石頭霍氏――広東の郷紳の家――
第八章　霍韜と珠璣巷伝説
第九章　霍韜による宗法システムの構築――商業化・都市化・儒教化の潮流と宗族――
第三部　郷紳と宗族
第十章　明末の商税徴収と広東社会

第十一章　明末の都市広州と搶米暴動
第十二章　明末広州の宗族――顔俊彦『盟水斎存牘』に見る実像――
第十三章　明末珠江デルタの郷紳と宗族
終章
付篇
一　中国の近世譜
二　宋―明の宗族　総論――元明の部――
三　書評　臼井佐知子著『徽州商人の研究』
四　旧羅旁地方調査記録――ヤオ族の痕跡を求めて――

本書が対象とする宗族あるいは広東という地域のいずれについても、評者はまったくの門外漢である。にもかかわらず、管見のかぎり拙評に先立つ書評も出されていないようであり、不勉強な評者には余計に荷が重い。もとより十分な論評はかなわないが、評者が読み取れたかぎりで本書の論旨をたどり、その上で評者の理解のおよばなかった点や疑問点を挙げて、書評の責をふさぐことをお許しいただきたい。なお、本書からの引用部分は直後に括弧書きでページ数を示す。

二

評者にも十分に理解できなかった点や疑問に感じられた点も少なくないが、まずはできるだけ著者の言葉に忠実なものとなるよう留意しつつ、本書の内容を示そう。

序章では、本書の背景として前著刊行以降の宗族研究および著者自身の研究の展開を述べた上で、本書全体の課題が示される。著者によれば、明代中期以降の珠江デルタは多民族・多宗教が混在し、北方の先進地域の儒教文明から見て辺境であった。そうした地域で宗族という儒教的親族組織が形成・定着する状況がどのように創出されたのかを複合的視点で検討するという。

第一部の四章は、商業化・都市化の中で珠江デルタが漢族の一元的な儒教文化に組み込まれていく過程を描いたものとされる。

第一章では正徳年間に始まった附搭貨物の抽分制と広東社会との関係が考察される。著者は、総督陳金らが抽分の制を要請した背景として、猺族などによる民族反乱鎮圧のための軍事費の一部を貿易による関税収入でまかなおうとする意図

があったことを強調し、両広の財政の特徴は広東の財政が広西のそれを支える一体的構造にあったと説く。

第二章では十五世紀なかばに本格化し、万暦五年（一五七七）の明朝による制圧――いわゆる「万暦の大征」――まで続いた羅旁の非漢族反乱の展開をたどる。

第三章では著者が言うところの「儒教化」のプロセスを検討し、甘氏という宗族に即して猺族から漢族への転身のあり方が考察される。万暦の大征後、明朝は猺族などの居住地に軍隊や移民、流民を定住させ、土地開発と防衛を受け持たせた。明朝に服属した新民や狼兵などに猺田を与えた場合もあるが、そうした戸籍や田地も最終的には漢族のそれへと統一されていき、猺族の中にも漢族の慣習を受け入れ、科挙を通じて上昇していく者も現れた。甘氏の事例は「儒教化」にともない、猺族たることが否定的価値しか持ちえなくなる状況が猺族の中に進行したことを示唆すると著者は述べている。

第四章では羅定直隷州の設置が取り上げられるが、特に注目されるのは羅定兵備道の役割である。著者によれば、万暦の大征後、羅定兵備道は行政・軍事両系統に監察・指揮権を持ち、参将・守備に対しても独自の指揮権を得たのであり、これを機に明初以来の三司による州県管理は、兵備道が三権を掌握して一元的に州県の領域を管理する形に改変され、両広総督による省級領域管理体制を末端から支えたという。

第二部では、明朝あるいは広東の郷紳がどのように儒教文化の普及を推進したかという課題について、五章にわたって検討される。

第五章では正徳十六年（一五二一）から一年ほど広東提学副使に在職した魏校の淫祠破壊を取り上げ、その具体的状況や目的、地元の反応などを検討している。魏校の政策は淫祠を破壊し、祖先祭祀や里社の神をもってそれに対抗させつつ、郷約・社学を通じて儒教的人格の養成を目的とするものであったという。魏校離任後、主に郷紳の学田侵奪によって少なからぬ社学が維持できなくなり、寺観や諸祠廟も依然ひとびとの信仰を集めたが、魏校が民間信仰に対抗する有効な方策と位置づけた祖先祭祀を広東の郷紳が行いはじめたことは注目すべきだと著者は評価する。

第六章では著者がかつて論じた黄佐の郷礼が再検討される。黄佐の構想は個人と家を礼によって整序し、郷約保甲組織に組み込もうとするもので、県城に設けられた四隅社学の教読が郷校の教読を通じて郷約保甲組織を統制する仕組みであった。実際には黄佐の構想どおりに定着したとは言えない

が、明代後半期以降、都市の書院や社学は士大夫の教育の拠点として科挙官僚制と連携し、ひとびとが科挙による任官という最高目標を目指す中で「儒教化」が実現していったとされる。また士大夫による宗族形成運動では同居共財の個別家族を基礎とする「家」が宗族集団に包摂され、広東において、教育・教化による「儒教化」は宗族が主導する特異な形態をとったとも推測されている。

第七章では珠江デルタで台頭する郷紳の実像をとらえるべく、嘉靖初年に中央政界でも活動した霍韜の記録によって石頭霍氏の経済活動の実態を分析している。著者によれば、あらゆる利権の獲得に奔走する族人の私益追求に対し、霍韜は直接に戒諭するほか、地方官にも取締りを要請するなどしたが、それは不法行為をともなう家産増殖に起因する紛争が自己の失脚ひいては自家の破滅につながることを恐れたからだという。霍韜が行った書院・社学の設立や大家族制度（合爨）についても、著者は郷紳が儒教的規範によって自家を教化し、それを郷里に推及していくものと性格づけている。

第八章では霍氏に伝わる珠璣巷伝説が検討される。霍韜は祖先の系譜を記すにあたり、秦の嶺南制圧時に南雄に移住したとする秦移住説ではなく、宋の南遷時に太原から南雄の珠璣巷に来たとする珠璣巷伝説を採った。著者はその理由について、霍韜のように士大夫・官僚としての地位を得た者にとって、家系の正統性を内外に知らしめるには中原出身であることが必須の要件であり、秦移住説では土着＝非漢族とみなされる恐れがあったために、これを捨て去ったとする。その上で、複雑な民族状況の中で珠江デルタが科挙官僚制を軸とする儒教文化の潮流に巻き込まれたことが、広東のひとびとに中原出自への願望を生み出したとの認識を示している。

第九章では霍氏の宗法導入について論じている。霍韜は高祖以下四代の祖先を祀る大宗祠を設立し、各房の子孫がそれぞれの祖先を祀ることができるようにしたほか、祖父を共同祖先（房祖）とする小宗の家衆で同居共材生活を維持する合爨も実施した。著者によれば、これらは子姪を教育し、科挙を媒介として国家との連携を保つことで名門の家系の維持を図るものであり、近世の宗法主義の趣旨に合致するという。さらに古宗法にならって祖先祭祀の継承を担う宗子を立て、族長が体制を維持する宗族統合のシステムが定着した点に広東の独自性を見出そうとしている。

第三部には四章を配し、いわゆる「儒教化」の最終局面をとらえようとしたものと位置づけられている。

第十章では一般に「鉱税の禍」と称される万暦年間の榷税の問題を取り上げ、両広の軍事情勢や広東における商業活動との関係に注目しながら考察する。榷税の大部分は軍餉から回され、それによる不足分を州県からの徴収で補ったために課税対象の拡大を招いた。仏山・広州といった大都市では徴税請負による中間マージンを得る棍徒などが暗躍したほか、著者が明代後期の広東で台頭してきた郷紳と断ずる豪右・権豪も、牙人や奴僕・近親者を通じて市場で支配権を獲得していたという。また広東の郷紳と福建商人との対抗関係にも注目し、福建税監高宗の入粤をめぐる事件も、福建商人が徴税請負の利にあずかろうとして引き起こしたとの見解が示される。

第十一章では明末広州で起きた搶米暴動を事例として、「儒教化」を主導したとされる郷紳が地域を文化的に統合する役割を果たせていたかを考察している。広州では海外貿易の公認を機に莫大な利益を上げる商人が出る一方、都市民の下降が進んだ。階層分化が進む中で坊廂制は解体し、郷約・保甲が組織されるが、搶米暴動に参加した下層民の多くはこうした組織に登録されていなかった。搶米暴動に際して平糶策を提案した黎遂球は郷紳に賑恤を期待したが、郷紳一般は利権争奪に奔走し、ひとびとを指導しうる権威を確立してはいなかったという。

第十二章では崇禎初年に広州府推官をつとめた顔俊彦の判牘『盟水斎存牘』から宗族にかかわる事案を紹介し、宗族の実像に迫ろうとしている。本章で取り上げられる倫氏の事例は、祠堂を中心とする施設を広州城内に所有した宗族が不肖の子孫による土地の転売を訴えて取り戻そうとしたものであり、宗族の意志が認められる点で重要だという。当該書所収の事例からも、宗族の集団的意志や紛争の解決は、宗子と族長が族人を指導する宗族の体制を前提にしていたと見て差し支えないと述べて、第九章における著者の見解を補強している。

第十三章でも『盟水斎存牘』を用いて郷紳が展開した諸活動の具体像を検討している。著者は特に沙田の争奪に注目し、郷紳による利権争奪の実行者となったのは、その子弟や宗族、奴僕、無頼などであり、郷紳の権力と宗族のネットワークが甚大な効力を発揮したという。また当該書に収める判語には、雑姓村落の中から有力宗族が台頭し、他を従属させるプロセスがよくわかるものや、族中の無頼が族人の土地を有力郷紳に投献・売却する事例が見られるとし、宗族間の競合が激化する中で求心力を高め、族人のみならず奴僕・無

頼など様々なひとびとを引き寄せ、多角的な利権争奪を可能にするのが郷紳であったとの認識を示している。

終章では各章における考察の結果をあらためて示した上で、それまでに論じてきた一連の事象のなかで、最先進地域の江南と同様、珠江デルタでも郷紳が絶大な権力を振るう構造が生まれ、科挙官僚制のもとでの等質的な中国的地域社会が成立したという。多様な産業をめぐる激しい争奪戦の中で、郷紳を送り出し、宗族を形成して親族の結合を強め、国家との連携を強めることが競争を生き延びる最大の方策となり、多くの家族がそうした潮流に巻き込まれていったことで、珠江デルタは全国的に見ても宗族の普及度が高く、組織が整備された地域として知られることになったと結論づけている。

付篇に収められる四篇のうち、一では欧陽脩「欧陽氏譜図」と蘇洵「蘇氏譜図」を対象として、近世譜の特徴と問題点とが検討される。宗法を強く意識した蘇譜に対し、宗法の運用を掲げなかった欧陽譜の形式は大宗の法の復活に可能性を開くものであり、明清では欧陽譜が多く採用された。近世譜のポイントは収族にあり、父系血縁関係の網を媒介として政治的経済的成功を実現するためのものであったという。二は特に一九八〇年代から二〇〇〇年代初頭までの日本における宗族研究の展開をたどり、地域ごとの宗族の展開や地域と国家との関係を解明していくことが宗族研究の進展に必要だと述べられている。三は臼井佐知子氏の著書に対する書評、四は広東羅定・鬱南（旧羅旁地区）における二度の現地調査の記録である。

三

本書を通読してまず印象に残ったのは、対象とされる事柄の多様さである。漢族の非漢族地域への進出とそれにともなう軋轢、禁絶と開放との間で揺れ動く海外貿易の展開とその影響、著者が言う「儒教文化」の浸透や宗族形成、都市における郷紳層の勢力拡大など、諸事例の具体的な展開を個別に取り上げるだけでなしに、それらが相互に関連づけられているとの印象を持った。そうした点からは、可能なかぎり当該時代・地域の全体像を提示しようという著者の姿勢が見て取れるように思われた。

本書の叙述は各種地方志や文集・族譜のほか、判牘という形で、推官といういわば官僚機構の最末端の立場から社会の

実情を伝える顔俊彦『盟水斎存牘』など、多くの史料を駆使して進められるが、そのこともまた右のような印象を抱かせる一因となっている。多様な史料から地域の全体像を描こうとする点は、本書の特徴のひとつにして、相応の評価が与えられるべき点に数えてよかろう。

直接には広東あるいは珠江デルタという地域の具体像を描きつつも、多様な諸地域が「中国」なるものへと統合されていく過程およびそこで動員される理念や仕組みに対する関心も、叙述の端々に読み取れるように思われた。現在の諸状況に照らしても、中国における国家統合の問題は文字どおり古くて新しい問題であり、近年とみに研究の進展が著しいこと、言を俟たない。もし本書にそうした問題関心が通底しているのであれば、その重要性じたいは評者にもよく理解できる。しかし、その上に展開される具体的な分析・考察に際しての著者の認識や視座については、遺憾ながら評者には十分に理解しえない部分が少なくなかった。

右のような大きな問題関心に対する答に相当するのが、本書のタイトルにもなっている「儒教化」であると評者は読んだ。よく理解できなかったのは、そもそも著者がそう称する諸事象をなぜそのように称さなければならないのかという点である。

評者の見るところ、本書において「儒教化」は、漢族の拡大・宗族の形成と発展・郷紳の台頭というそれぞれ主題を異にする三部を貫く主軸に据えられているようである。そうしたことが可能だという点からして、本書中の「儒教化」なる語は必ずしも同次元にはない諸事象を概括するものとして使われていると言える。試みに「儒教化」の定義を示すと思われる記述をひろってみると、たとえば第一部では端的に「漢化＝儒教化」と言われている。すなわち「非漢族が文化的に漢族に包摂され、最終的には国家の版籍に登録されること」（九一頁）あるいは「非漢族を含む「化外の民」を教化によって漢族へと変身させること」（一六〇頁）が「漢化」であり、「前近代において漢族が創り上げてきた文化は儒教文化なので「漢化＝儒教化」である」（九一頁）という。また「儒教化の核心をなすのは科挙官僚制である」（二七二頁）との認識も随所に示されており、その上に「本稿（ママ）では、儒教化という用語は、科挙官僚制にくみこまれるなかで、地域社会に宗族などの儒教文化が浸透していくプロセス全体を指すものとして用いたい」（二二三頁）とも述べられている。これなどにも示されるように、第二部で中心となる宗族形成のほ

か、第三部で主に取り上げられる「郷紳の登場」も「科挙官僚制を軸とする漢族の儒教文化の中に包摂されることを象徴」（二七三頁）するものと位置づけられている。

明朝支配の浸透・宗族形成・郷紳の登場のいずれについても、たしかに儒教とのかかわりが皆無であるとは言えない。しかし、その点のみをとらえて、次元を異にする右の三者を「儒教化」と一括しようとするのは、以下に述べていくような点からしても、いささか不可解との感を禁じえなかった。

たとえば、本書の基調として、地理的に辺境に位置するとともに、著者が「科挙官僚制を軸とする漢族の単一な儒教文化」（三七五頁）の浸透という点で後発と位置づける珠江デルタが、宋代以降、明代に至るまで「中国の最先進地域であり、最も儒教文化の水準が高い長江下流デルタ地域（江南）」（九一-九二頁）の水準に追いつくという構図が念頭に置かれているようである。それゆえ本書の議論も、宗族形成にせよ郷紳の台頭にせよ、江南の事例から得られた諸事象の生成パターンを指標とし、それを珠江デルタにあてはめるという形で組み立てられているように見える。このように理解して大過ないとすれば、ひとつには、江南地域の特徴というのは著者が考えるほどに普遍的な要素と見なしてよいかという疑問がまず浮かぶ。[1] そしていまひとつには、そうした問題以前に、珠江デルタの事例から当該地域特有の生成パターンの抽出を必ずしも目指さないのであれば、著者が「儒教化」の指標とした個々の事象の生成パターンじたいは、江南を主たる対象地域とする先行研究ですでに実証され、現に本書がそうしたように、それに依拠した議論ができるほどに熟した理解として共有されていることになる。とすれば、結局のところ「儒教化」なる視座によって何が新たに見えてくるのかが明確につかめず、そうした視座を設定することの意義を理解することにも評者は困難をおぼえた。

いわゆる「地域社会論」の提起以降、特に明確に意識されるようになったことのひとつに、秩序のあり方を考える、ないしそれをパラダイム化する際、ひとびとの具体的な行動――そうした行動の裏にある意識もふくめて――から秩序は作られるという認識に立つことが挙げられると思う。[2] そうした考え方に対する著者のスタンスの如何はともかく、一般に「儒教化」と聞いて、儒教こそがひとびとの行動を左右する主たる要因であったとの意に解することは、少なくとも右のような視座に照らして無理のないものであると考える。そうした考えに立つと、著者が「儒教化」と性格づけたひとびと

の行動・営為の直接的な動機として、果たして儒教がどれほどの位置を占めていたのかという点も疑問に感じられた。端的に言って、十六世紀の人口急増・商業化の波に押されるように非漢族地域に拡大し、土地集積を進め、ついには非漢族の反乱に対して血腥い軍事制圧作戦を敢行した漢族あるいは明朝の動向は、儒教の浸透を直接の目的としたものと言ってよいのだろうか。たしかに明朝の科挙・学校制度は朱子学と密接に結びついてはいたが、だからと言って、宗族の形成・維持もふくめ、科挙官僚を安定的・継続的に輩出しようとするひとびとの戦略やそれにもとづく営為は、儒教を主目的としたものと性格づけることが妥当なのだろうか。むしろそうした戦略・営為の主たる目的は、下は激しい競争社会におけるセーフティネットの確保から上は各種の利権拡大に至るまで、政治的・経済的・社会的な実利の面におかれていたこと、著者が郷紳の台頭を示す例として提示したひとびとの行動が如実に物語っているのではないか。

こうした疑問はどうやら評者のみのものでもなさそうである。そのことを示唆すると思われたのは、付篇の二として収録された文中、著者と遠藤隆俊氏の共編書に収める片山剛氏の論文について[3]、その「目的の一つは、「宋代以降、特に十六世紀以降の中国における宗族結合の目的を、珠江デルタのそれを含めて、科挙官僚を代々送り出していくことの一点に求める仮説」を提示した井上の見解を批判することにも置かれている」（四三五頁）と述べられている部分である。これに対して著者は「筆者に対する氏の批判については誤解も含まれているように思われる」（四三六頁）とした上で、前著に対する小島毅・寺田浩明・山田賢の諸氏から提起された批判への応答もふまえて自説を述べている。著者の主張を要するに、宗族形成の動因はその段階あるいは地域や時代の特徴に応じて様々に想定しうるのであり、科挙官僚の輩出という目的のみが排他的に存在しているのではない、というものと評者は理解した。そうした宗族形成の諸々の契機・要因をひとくくりにする概念として本書で提起されたのが「儒教化」なのだとしても、必ずしも儒教を一義的な目的とするわけではないひとびとの行動およびそれによって生じた諸事象までをも「儒教化」と称することに、評者はやはり違和感をおぼえる[4]。そうしたひとびとの行動や諸事象を合目的的に無理なく解釈しうる説明が先行研究で示され、著者も基本的にその説明に依拠しているのであれば、なおのこと「儒教化」なる視座を提起する意義は見えにくい。もちろん著者が独自

の定義のもとに「儒教化」を説く以上、著者の言のごとく、評者の違和感も結局は誤解に帰されるべきものなのかもしれないが、少なくとも本書の叙述から、著者が提起する「儒教化」なる視座・概念の有効性を十分に理解することは評者には難しかった。

評者の関心に引きつけた指摘となるが、本書ではそもそも「儒教化」を掲げながら、明代における儒教の展開それじたい、ないしそれに関連づけた叙述がほとんど見られない。あらためて言うまでもなく、思想史の分野において、本書が対象とする時期と言えば、いわゆる陽明学の成立と展開が大きなトピックとなる。管見のかぎり本書では、第一章の第二節で両広総督に起用された最晩年の王守仁が田州・思恩両府の非漢族反乱の鎮圧にあたったこと、第七章の第一節で霍韜の経歴を述べた中で、同郷の方献夫のほか、陳献章に学んだ湛若水らと西樵山で講学に努めたことにそれぞれ言及されるのみで、全体としてさほど突っ込んだ叙述がなされているようには見えない。周知のとおり陽明学は、商業化の進展、競争社会の到来と階層分化、あるいは明朝支配の拡大にともなう漢族・非漢族間の軋轢など、まさに本書で取り上げられる諸事象に表れるように、硬直化した既存の理念や制度では対応できなくなってきた社会の現実の中で、ほとんど科挙の受験科目に堕した朱子学にかわる思想的な拠所として官僚・士大夫に受容された。王守仁そのひとについても、たとえば陽明学の核心をなす思想のひとつとされる「心即理」を悟った「竜場の大悟」は、彼が貴州の竜場駅という言葉も通じないような蛮地に左遷されたときのことであったし[5]、本書でも言及されるように、後年には南贛巡撫また両広総督として、いわば明朝支配の最前線で地方統治にあたったのである。このように見るならば、広東・珠江デルタという地域に対して著者が性格づけたのと同様、華夷が入り混じる地域でどのように王朝支配を進めるのか、そこでいかにして社会を秩序づけていくのかという問題に身をもって対峙する中で、王守仁の学は形を成したとも言える。陽明学に対して正負いずれの態度を採るにせよ、それと無関係ではありえなかった当時の士大夫たちが、まさしく本書で論じられるような諸課題に対してどのような実践を展開し、かつそこにどのような思想的裏づけが見出せるのかといった点は、明代後期の社会と思潮の動向を双方向的に考えようとする際、重要な論点となりうる。朱子学の革新運動とも性格づけられる陽明学の一面を考えれば、単純な二者択一の図式に収まらず、あるいは朱子学

で説かれる理念ないしそれにもとづく理念的な秩序形成のあり方がより強調される面もありえよう。著者が説く「儒教化」の先に想定される「儒教」的なるものとはいかなるものなのかを明確に示すという点でも、明代の儒教そのものの動向と本書で論じられる内容とのかかわりについて、より突っ込んだ議論を示してほしかった。

その他、これも「儒教化」という視座に起因するのだろうか、本書の第一部は、漢族による入植・土地集積と非漢族の佃農化ないし漢化、その過程で起きる非漢族の反乱と王朝による鎮圧・教化という軸に沿った叙述に終始する。こうした問題をあつかう際、史料の分析・解釈や叙述のあり方に相応の慎重さが求められることは、昨今の研究において特に強調されていると理解するが、そうした水準に照らすとなおのこと、第一部で示される著者の理解には、やはり一面的だとの感をまぬかれない。本書には「辺境」・「華夷」・「商業化」といった語が頻出するが、こうした関鍵語から導き出せる例として、たとえば同時期の遼東では、商業化の影響を受けて奥地で産出する毛皮・人参・淡水真珠といった奢侈品に対する中国国内での需要が高まり、そのことがジュシェン社会の階層分化をもたらしたほか、明との経済・軍事関係にも影響をおよぼした。[6] こうした例をふまえると、ヤオ族が住む山地の産品に対する需要の有無や変化、そのことが彼らの社会あるいは彼らと漢人との関係にいかなる変化をもたらしたのか、その過程で双方の間にどのような介在者が存在したか、といった切り口から見ることによっても、おそらくは複雑に錯綜した状況にあったと思しい「商業化」時代の「華と夷の間」の実態解明に不可欠な知見を少なからず見出せたのではないかと感じた。

四

最近はどこでもそうであるように、本書もまた相当の多忙のうちにまとめざるを得なかったであろうこと、重々承知の上ではあるが、編集にかかわる部分で作業の粗さを感じさせる部分が見受けられたのは残念であった。序章によれば、書物としての整合性を持たせるための統一・整理の作業が行われたようだが、先にも指摘した「本稿」の語のように原載時の表現が残っているもののほか、注において著者の旧稿が引かれる場合、初出の雑誌論文のみが注記され、前著および本書に言及されていないことが多々あった。本書に収録された

ものについては、序章で旧稿との対応関係が示されてはいるものの、一般にはなんらかの修訂を施して著書に収録する以上、著書に言及せずに初出論文を参照せよという注記は、やはり読み手に違和感をあたえる。また雑誌論文の再録という性質上、致し方ない面はあるが、叙述の重複も一再ならず見受けられたほか、終章において各章の内容を総括した部分では、第三章として第四章と思しき内容が、同様に第四章として第三章と思われる内容がそれぞれ要約されていた。

以上、論評と呼ぶのもはばかられるような評言を書き連ねてきた。門外漢の不勉強を露呈し、評者の理解のおよばぬ点を羅列するばかりで、本書の意義を十分に伝えることができなかったことについて、著者ならびに読者諸賢の寛恕を請いつつ擱筆する。

研文出版、二〇一九年二月、A5版、四八三、三四頁

註

（1）濵島敦俊「明代江南は「宗族社会」なりしや」（山本英史編『中国近世の規範と秩序』研文出版、二〇一四年、所収）は、明代後期における江南デルタ社会において、宗族が普遍的存在でなく、構造論理としても組み込まれていなかったことを論証している。

（2）こうした立場を端的に述べたものとして、さしあたり岸本美緒『明清交替と江南社会――十七世紀中国の秩序問題――』（東京大学出版会、一九九九年）の「序」、岩井茂樹編『中国近世社会の秩序形成』（京都大学人文科学研究所、二〇〇四年）の同氏による「序」を挙げておく。

（3）片山剛「明代珠江デルタの宗族・族譜・戸籍――一宗族をめぐる言説と史実――」（井上徹・遠藤隆俊編『宋―明宗族の研究』汲古書院、二〇〇五年、所収）。

（4）片山氏は、註（3）所掲の論考で検討した宗族が科挙合格者を出さず、また科挙合格者を出すことを志向していなかったことを実証し、著者の仮説によっては宗族結合を説明できないと断じている。同論文四八〇頁、参照。本書付篇所収の文章における著者の反論も、また「儒教化」も、片山氏の批判に対する説得的な反論になっているようには思われない。

（5）岡田武彦『王陽明大伝――生涯と思想――』（『岡田武彦全集』二、明徳出版社、二〇〇三年、所収）第七章「竜場の大悟」八九・一一一頁。

（6）岩井茂樹『朝貢・海禁・互市――近世東アジアの貿易と秩序――』（名古屋大学出版会、二〇二〇年）第三章「辺境社会と「商業ブーム」」参照。

〔附記〕原稿提出後『歴史人類学学刊』第十八巻第一期、二〇二〇年に張葉氏による本書書評が掲載されていることを知ったが、すでに校正の段階に進んでお

り、その内容を本評に十分反映させることはかなわなかった。この点、著者ならびに張葉氏の寛恕を請うとともに、読者にはあわせて参照していただくことをお願いしたい。

（じょうち　たかし　同志社大学文学部・助教）